

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

「はじめの一步」

総選挙結果を考える

： 2

永遠に生きるもの

蓑輪 泰臣： 4

―向坂逸郎著『マルクス伝』を読む(二)―

カールマルクスと向坂逸郎(2)

原野人： 6

―人口減少のなかでも過剰人口は必然―

やがて大河となる！

沢井 清： 9

―10・30 近江八幡 脱原発市民ウォークの火 30名でスタート―

協同組合労働について

滝野 忠： 10

―斎藤君はマルクスをどう歪めているか(七)―

読者からのおたより

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

旬刊社会通信

NO.1349

二〇二一年十二月一日号

二〇二一年十二月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

「はじめの一步」

総選挙結果を考える

頭と行動

「はじめの一步」の選挙が終わった。「はじめの一步」というのは、小選挙区制導入（1994年）、小選挙区制での第一回総選挙（1996年）から4半世紀、ようやくと野党が、「自民をひきずりおろすには一つになって戦うほかない」との当たり前の理念を実践に移したことである。これからの選挙闘争の枠組みづくりの始まりである。

総選挙は289の小選挙区選挙と比例11ブロック176の議席をめぐり戦う。小選挙区で受かるのは一人、メディアの世論調査が示すように、全支配階級を支持基盤とする自民党は強く大きな基礎体力をもつ。体力の弱い野党がバラバラに戦っては当選の可能性はない。政党は選挙のプロ、頭ではわかっている。しかし、主義主張がちがう政党が一つにまとまり、実行に移すことがどれほど難しいかである。

民主党政権崩壊後、9年にわたった安倍政権下での政治反動、腐敗と墮落に自民党支持者の批判も強い。保守反動政党の自公が、総選挙で改憲発議可能な議席を手に入れつづけてきたからでもある。歴史を学ぶことは今を学ぶことである。この十年余の選挙結果をふり返る。

共闘

2013年総選挙は自民294、公明31、極右反動の維新54の379。今次選挙は自民276、公明32、維新41の349、連合の電機、自動車、鉄鋼造船、UAゼンセンといった反共連合が支援する国民は11。

改憲案提出に必要な議席は全議席465の三分の二の310、保守反動の諸政党は条件しだいではいつでも改憲に動ける。

この力が「反動」をつくった。名は上げぬが10年前なら「りっぱな」保守と自他ともに認め合った著名な評論家が、「ぼくがリベラルとされるまでに、世の中変わってしまいました」と自嘲的な笑みをうかべるまでにある。

自民・公明はおごりにおごり、国民は無視されつづけてきた。岸田さんが、「聞く耳をもっている」といわざるをえないまでにある。

自覚した労働者、知識人は「一つになって戦え」と野党をつき上げた。戦争法反対の全国的な闘争をつうじて、野党も国民も学ぶことを学んだ。共闘の追求である。共闘は、まず立憲・共産・社民・れいわ4党の共通政策として始まり、政権協力、選挙協力と進み、小選挙区の七割で一騎打ちとなった。

ぼくは共闘大歓迎、共闘の力学の楽しみは一プラス一が二の足し算になるか、さらに三や四の掛け算になるか、それともマイナスになるかである。マイナスはない、どれほどふえるか、ふやせるかである。情勢が沸き立つ状況にあるなら、

一プラス一は算術級数的ではなく、幾何級数的に、螺旋状的に飛躍がある。結果はどうであるか。

『社会通信』（9月15日付）に、「最大野党の幹部には『自民を圧倒できる、地崩れの勝利をおさめられる』との根拠なき楽観論が見える。昔の支持率は下がら。しかし、自民の支持率は下がらない。野党の支持率も上がらない。自民は大きな組織をもつ。野党、とりわけ立憲民主党は組織が弱い。総選挙は組織と組織の戦である。組織強化の努力こそが政治の力である、『風』は変わる」と書いた。

運動の弁証法

運動の力学、変化はおもしろい。野党が攻勢を強めれば、権力政党もそれに反抗し、対抗、抵抗し、野党に攻勢をかける。

自民は野党とは比較にならない組織力をもつ。だから、保守勢力の反抗に対抗するには強い組織力しかない。

権力政党は国民の税金、予算を「共同の金庫」と考え支配し、支持者、仲間によらまく。岸田は選挙中に数十兆の新経済政策をつくと吹いた、買収である。自民党支持基盤の大企業と関連企業へのばらまきである。自民党の選挙母体は業界団体、後援会、許認可権をもつ官僚への支持者の紹介、あっせん。読売新聞などと傘下のテレビ局など各種メディアは自民党の「反共闘」の宣伝部隊である。

結果が出た。自民は負けなかった、公明は数をふやした。どれほどふえるか楽しみだった立憲は数を減らし、共闘を批判した国民は数をふやした。共闘をど真ん中で引つ張った共産も増やせなかった。

「はじめの一步」。これからがんばれ、がんばれるが結果である。小選挙区では勝っている、自公を追いつめた、成果である。問題はなぜ残念な結果になったのか、課題は何かをともに考え教訓を学びあうことだ。

課題

政治の力は組織力、組織と規律だ。立憲の前身は、保守二大政党制をめざす政界再編下、大急ぎで総保守勢力がつくった民主党。議員は時代の流れに敏感で、組織と規律より自由大好きに流れる。組織と規律を考えることは少ない。

立民は自治労、私鉄など旧総評労働組合の支持を基盤とする。労働組合の力は、数と質にもとづく規律と組織である。今の社会は「働く者」の約90%が労働者、労働者を組織する労働組合が最大の政治的力になる。支配階級はこのことをよく知っている。だから、労働者を、労働組合を丸め込むため、手段を選ばない。知っているにたいたり、鼻葉をかがせたり、思想的に洗脳したりである。

代表選挙がおこなわれる。「共闘のあり方」がテーマとされる。国民は維新と連携の方向に動いている。半年後には参院選。一人区は32、ここを勝ち抜くことが、次の展望をつくる。勝つには「共闘」しかない。「共闘」の積み重ねが自民をやっつける力をつくる。こんどの選挙の共闘はこうした意味でも「はじめの一步」である。次号以下でさらにくわしく考えていきたい。

永遠に生きるもの

―向坂逸郎著『マルクス伝』を読む(二)―

「男」と「女」

『マルクス伝』は二人の娘たちのマルクスお父さんへの質問を序説にのせています。たくさん項目があります。はじめの数項目への答えです。

「好きな徳―素朴、好きな男の人の徳―強さ、女の人の徳―弱さ、おもな性格―ひたむき、幸福感―たたかうこと」。

向坂先生は、男の「強さ」と女の「弱さ」についてどう考えるのヒントを与えてくれています。

【「あなたの好きな女の人の徳」というのに答えて、「弱さ」といつている点について、このごろの若い人々から質問を受けることがある。女性解放のこのごろ「弱さ」をマルクスが好きな女性の徳というのはおかしい、という意味の質問のようである。男の場合に、「強さ」と答えたから、次いで「弱さ」という言葉が自然に対照的に出てきたのであろう。しかし、「弱さ」ということが、ちよつとした困難に動揺したり、いたずらに感傷的であったり、簡単に誘惑されたり、虚栄心にとんでいたりすることであったならば、そんな女を好きになるわけではあるまい。マルクスは、その夫人を終生この上もなく愛して変らなかつた。夫人が亡くなったとき、エンゲルスが「マルクスも死んでしまった」と思わずいったように夫人を深く愛していた。しかし、マルクス夫人は、感傷的な虚栄心にとんだ女性とはおよそ反対の人であった。

プロイセンの貴族の生れで、兄さんは後にプロイセンの内務大臣になった。こんな家に育った人であったが、ユダヤ人の出であるマルクスの愛情にこたえて、敢然として彼と結婚した。当時としては、このことだけでも、マルクス夫人がどんなに強い心の人であったかがわかる。

マルクスの末娘エリナだけでなく、夫人を知るすべての人々がこの夫妻の愛情のこまかさを讃えている。】(新潮社『マルクス伝』24頁)

社会主義は必ず実現する

「資本主義の基本的矛盾が、どのようにしてこの社会の胎内に成長する労働者階級の歴史的使命を達成するか、これは、マルクス・エンゲルスの科学的探究が発見した社会的法則である。資本主義の持っているこの基本的矛盾の法則によって、社会主義を実現するだろう。しかし、この実現の方法や実現した社会主義の態度は、時代が違い、国が違い、歴史的条件が違うにしたがって異なる。そう考えるのがマルクスシズムなのである。

マルクスは、労働者階級が必ず社会主義社会をつくり上げるといふ必然性を、資本主義の中に発見した。マルクスはこう言っている。社会主義社会は、必ず来る。しかし、労働者階級がこの目的を達成する道程がどの国でも同一である、と主張したのではない。歴史的社会的な諸条件のいかんによっては、労働者階級が、社会の変革を平和的な道によつて達することができるとも場合もある。」

先輩、今まで社会主義を唱えていた人たちが、現実の資本主義社会を見て、社会主

義世界体制の崩壊、社会主義への必然性に自信を持ってなくなっていますね。もう一度マルクス・レーニン主義の、向坂逸郎の古典の勉強のやり直しですね。

「社会主義が地球を蔽うまでになっていないことについて、自分たちだけ利益する少数の人間があり、この連中が、生産手段の主要なものを独占し、政治権力を握っているだけでなく、これらのことよって、社会の教育宣伝の諸機関の主要なるものを全部にぎっており、資本主義の基本的矛盾を取り除こうという運動の成長を抑えることができるものだから、なかなか社会主義が地球を蔽うようにならない。」

先輩、このように述べています。われわれ側の思想闘争の弱さですね。

先輩、やはり、小さな学習会の場（マルクス・レーニン主義・向坂逸郎の思想の勉強）を少しでも多く作ることですね。ブルジョア思想に数十年間浸かりつばなしの人間がすぐに社会主義思想へ転換する、そう簡単ではないですよ。粘りつよく語りかけ、学習を積むしか近道はないですね。向坂先生は、『青年に寄す』で、歴史は人間がつくるのであるから、われわれの読書は、つねに読んで得た知識を実践において生かすことにある、その意味で「知は力である」と強調されます。

資本主義の基本矛盾

資本主義社会の基本的な矛盾とは、どんなものだろうか？と述べていますね。

「今日の社会が少数の利益のために多数人の幸福は犠牲にされているということである。

資本主義社会では、社会は人間が餓死するのに責任を持つ必要がないことになっている。生産手段を持たない近代労働者は、失業すれば自分と一家の生きる方法を失う。すぐに死なない場合でも、栄養失調は徐々に人間の命を奪っていく。失業がどんなに悲惨な結果を生むかは、失業のない階級には分かるまい。

主婦の一人が、失業は殺人である、と言っているのは、単に労働者の一家のことではなく、資本主義の根本的な矛盾なのである。生産力が発展することは、人手を減らすことを意味する。生産力が発展するほど、社会を支える階級の生活が不安になる。」

先輩、東海道新幹線、新型編成が導入されるたびに乗務員の乗組み要員が減らされてきましたよね。0系、100系、運転士は2人乗務、車掌は4人ないし5人乗務してましたよね。210キロ高速の0系から、今のN700系285キロの速度アップ、運転士は1人乗務、車掌は2人乗務、近代化された新幹線、輸送力アップ（生産力の発展）、必要要員は逆に半減ですね。マルクスの言葉は、資本主義社会発展でなお一層現実味を帯びていますよね。忘れてました。「余った乗務員」は、関連会社へ出向です。

「資本の利益が主人公で人間が奴隷になっている。資本の利益のために人間が死ななければならぬ。労働者階級は、資本のいけにえとして生きる外に生きようのない非人間とされている。」

「非人間的」ということ 労働者と資本家

先輩、我々もよく「非人間的」という言葉を使っていましたよね。その意味は、深

く考えてなかったのでは。

「非人間」とは、資本家、労働者両方使っているが、どう違うのか？と以下説明しています。

資本家は、彼等と資本の利益のためには「人殺し」を正義と考える非人間となっている。したがって、同じ非人間にしても、資本家階級は、この非人間のうちに「快適と安定」を感じ、この非人間化が、人間的な外観をもっており、そのために自身自身を「人間」とかんじている。

労働者階級は、不快と不安定を与えられた非人間化を受けている。資本の利潤のいけにえとなり、自分と自分の家族を破壊され、ふみにじられ、時として失業者として職場から放り出され、「橋の下にねむる自由」と、自殺する「自由」の外に自由のかけらをも奪われた非人間として感じる非人間になっている。

矛盾の発展 弁証法

先輩、次の文には、線引きと二重丸と米印がついているので、私の中ではすごい内容と受け止めた箇所、注意して読んでください。

「マルクスは、このような非人間化をただ非人間化、窮乏、として発見しただけではない。この非人間化された労働者階級のうちに、今日の社会を社会主義社会に転化させる力を認識したのである。マルクスは、利潤、できるだけ多い利潤のために競争が、生産規模を拡大し、生産力を発展させ、そのために資本の集積と集中を促進し、したがってまたそこに労働者階級の失業の必然を見出した。資本主義の発展の法則は、同時に労働者階級の窮乏を拡大し、強度にする外に方法がないことを見出した。それだけではない、資本主義的蓄積の一般的法則は、労働者階級を窮乏化するだけでなく、同時に、この作用によって彼らを訓練し、結集し、組織化する。彼等の労働する所は、近代的工場、近代的交通通信機関、近代的銀行、店舗である。」(39頁)

先輩、先輩は「資本論」学習が3回目に入った、と年賀状に書いていましたね。マルクスは、資本主義の発展が、資本のメカニズムの中から、自分自身を否定する力を生むことを「資本論」で証明した。と書かれています。ぜひ、『社会通信』に寄稿してください。

(つづく 蓑輪 泰臣)

カールマルクスと向坂逸郎 (2)

— 人口減少のなかでも過剰人口は必然 —

貨殖が自己目的となつて、人間はそのための非人間となる。過剰人口は必然となる。

『マルクス伝』はこのことを詳しく説明する。

「資本主義的生産の「絶対的法則」は剰余価値の生産である。即ち「貨殖」である。資本関係はこの貨殖なくしては存在しない。剰余価値の生産は、各資本間の競争を前提に行われている。私有制と社会的分業は競争の土台である。競争にやぶれることは、剰余価値の喪失である。つまり資本の死である。資本は何をおいても剰余価値を獲得し、これを増大するために競争しなければならぬ。資本関係の小規模な出発

点においては、剰余価値は資本家の消費を意味していたかも知れない。しかし資本がその競争の過程で増大し、競争を激しくするにしたがって、剰余価値そのものが自己目的となる。始めは消費のための剰余価値の獲得が、剰余価値の増大をはかり、その増大が競争の過程を通じて行われるにしたがって、資本を拡大しさらに大きな剰余価値を他の資本の競争を抑えて取得する。そうしなければ自分自身が剰余価値を得られなくなるからである。このようにして資本家にとっては剰余価値の取得、価値増殖が自己目的となつてしまい、価値増殖のための価値増殖となり、そのためには人間性は無となり、人間が犠牲となる。失業者を出すこと、石炭業「合理化」のために十一万人を首にすることは当然のこととなる。人間は価値増殖のための動物となる。」

自然的人口増減から独立して、資本主義は必ず「過剰人口」をつくる。

「資本主義は、労働者階級の一定部分をつねに「産業予備軍」としてもつていなければならぬ理由がある。

近代産業は「中位の活況、生産の繁忙、恐慌、沈滞の時期」等の周期的変動をする。突如として労働力を多量に必要とする時期がある。資本はその気まぐれな価値増殖欲を満足させるためには、いつでも追加労働力を手に入れることのできる予備軍をもつていなければならぬ。人間が自然的にもつている人口増殖の方法ではまに合わない。資本の必要とする産業予備軍は、人間の自然的人口増殖から独立して存しなければならぬ。それは資本そのもののメカニズムによつてつくり出されたいろいろの形態にある失業者である。このようにしてこの「過剰人口」は、資本の飛躍的蓄積を可能にする条件ともなつてゐる。

マルクスの「過剰人口」は、人口の自然的増殖から独立してゐる。この点の認識なくしては、この問題の理解はない。資本主義がもしその人口法則をただ自然的なものとしてもつてゐるだけであれば、その今日の飛躍的發展は不可能であつたであろう。

「過剰人口」がこの社会では自然的増殖から独立してゐる所に、資本主義の人口法則の特質がある。「過剰人口」は資本主義では人口の自然律から独立してゐる。資本主義では自然的人口の増加、停滞、減少と無関係に「過剰人口」をつくり出すメカニズムがあるといふのである。例えば、自然人口が停滞または減少してゐるとき、労働人口が資本の価値増殖欲に応じきれない場合が生じるとする。この場合労働力に対する需要は次第に供給をこえる。労働賃金は高騰する。ある程度以上に労働賃金の高騰がおこると資本の価値増殖欲は衰えはじめ。もしこの賃金の高騰が価値増殖を不可能にする程度となるならば、資本主義そのものが存続しえない。もし失業者が一人もいず、労働人口に対する需要がさらに増大するならば、賃金の高騰ははかり知ることのできない高さに達する。資本は自らを否定するものではない。資本はこの資本主義に對する賃金の圧迫をどのようにしてはねのけることができるか。有機的組成を飛躍的に高度化する方法である。停滞せる自然人口、あるいは減少する自然人口の制限を突破して、その中から失業者又は産業予備軍をつくり出す方法は、有機的組成の高度化である。技術の發達はこれを可能にする。有機的組成の高度化は、使用労働者数を絶対的にも減少させることができる。単に相対的にでなく、絶対的に可変資本を減少させる有機的組成は、停滞せる自然人口、減退せる自然人口の中からすら産業予備軍をつくり出しうるのである。可変資本部分を絶対的にすら減少させることができるから

である。例えば、オートメーションは現代すでにこのことを可能にしている。」

いまや日本では自然人口が減少している中においても、失業や半失業は増大し、新卒者の就職さえ困難を極めている。資本主義のグローバリゼーションは世界中に失業者をあふれさせている。

資本主義的蓄積の一般的法則の要約 マルクスは『資本論』第一巻第七篇第二十三章を「資本主義的蓄積の一般的法則」と題し、その理論的説明をおわるにあたって、この法則をつぎのように要約している。

「資本主義的体制の内部では、労働の社会的生産力を高めるためのすべての方法が個々の労働者の犠牲において実行されること、生産の発展のためのすべての手段が生産者の支配搾取手段に变じ、労働者を部分的人間に不具化し、彼を機械の附属物に引き下げ、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるにしたがって、労働過程の精神的諸力を彼から疎外すること、これらの手段は彼らがそのもとで労働する諸条件を歪め、労働過程で極めて狭量陰惨な専制に彼を服させ、彼の生活時間を労働時間に転化し、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪の下に投げこむこと、これらのことは第四篇において相対的剰余価値の生産分析の際に、われわれの見るところである。しかし、剰余価値のためのすべての方法は、同時に蓄積の方法である。また蓄積の拡大はすべて逆にかの方法の発展のための手段となる。それゆえ、資本が蓄積されるにしたがって、労働者の状態は、彼が受ける支払いがどうあるにせよ、高いにせよ、低いにせよ、悪化せざるを得ないということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をしてつねに蓄積の範囲及び精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりもさらに固く、労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を条件づける。したがって、一極における富の蓄積は、同時に対極における、すなわちそれ自身の生産物を資本として生産する階級の側における貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積である。」

向坂は「この章はベルンシュタイン以来誤り解されていわゆる「窮乏化論」の章として取り扱われ、批判された。労働者階級の運命とは、労働者階級が窮乏化することだけの作用と考えられ批評された。この批評に応じたマルクシスト側も、窮乏化することだけの問題としてとらえ反批判した。」として、マルクスの他の一節とエンゲルスの『エルフルト綱領批判』の一節を引きながら、正確な理解を論述している。「マルクスはこのように資本主義の一般的法則が、労働者階級におよぼす作用を、一方では労働者階級に犠牲を強いるものとして描いた。即ち、いわゆる窮乏化作用として描いた。他方では、労働者階級がこれに反作用して行う彼等の組織された抵抗を明らかにした。」

このように作用と反作用の統一的理解こそが不可欠である。

斎藤幸平君は、労働者階級が窮乏化作用に対する反作用として組織する抵抗の成長と発展によって、やがて窮乏化作用そのものを消滅させるに至る必然性を理解できずに、小さなコモン（共有財産）を増やしてゆけばいずれ共産主義になると空想している。

（原 野人）

やがて大河となる！

10・30 近江八幡 脱原発市民ウォークの火30名でスタート！

98回目を迎える「脱原発市民ウォークin滋賀」の悲願であった滋賀県湖東地区での反原発デモの開催。10月30日(土)「脱原発市民ウォークinしが近江八幡2021」の第一回デモがついには実現した。脱原発をめざす東びわこ市民の会や連帯ユニオン関西地区生コン支部を始め、湖東記念病院事件の再審無罪の西山美香さんや、京都・大阪からも参加いただいた。

開会、呼びかけ人である西村静恵さんは、「反原発の運動は、放射能の被曝がもつと語られる必要があります。さらに、すべての原発を止め、無くしていくことに繋げる覚悟です。さらに、私たちの人権の問題としても原発を止めなくてはならないのです。被曝に向き合う方々の思いも込めて、また、未来へ向けた私たちの責任として、原発全廃に向けて私たちが繋げていきましょう。なんとしても、原発を止めましょう。」と決意を表明された。

ついで若狭の原発考える会の木原壮林さんから「美浜3号機運転も当初より半年遅れて再稼働や、45年越えの老朽原発、高浜1・2号機の再稼働を当面断念させたのは、私たち反原発運動の成果です。老朽原発停止を突破口に原発全廃に向けて大きく前進する好機です。」と激励された。さらに、湖東記念病院事件再審無罪の西山さんから発言をいただいた。「東電福島原発事故の時収監中で、ものすごく心配でした。面会した井戸弁護士より、原発関係の本も紹介されていました。今日ここで皆さんに会えてうれしい。」と発言された。

後の国賠裁判で、検察側滋賀県警は「この人がやったと信じている。」と再審無罪にもかかわらず、日本の裁判制度を無視するという態度で、滋賀県知事が会見で謝罪し、県警本部長更迭となった『わが』滋賀県警の顛末。

デモのシュプレヒコールは、秋晴好天の土曜の巷間をにぎやかした。また一つ市民運動が生まれ関電・政府は追い詰められていく。小さい運動の始まりだか、やがて大河となる。
(脱原発市民ウォークinしが近江八幡 2021 沢井清)

老朽原発このまま廃炉！

1 井戸謙一弁護士 講師に講演会

来月で1000回を迎える「脱原発市民ウォークin滋賀」。2011年5月に始めて約11年。2016年50回記念では750人参加の原発全廃「びわ湖一周デモ」の完走。先月98回では、念願の滋賀湖東・近江八幡での「脱原発市民ウォークinしが近江八幡2021」の開催へと裾野は広がってきた。

12月5日開催「老朽原発このまま廃炉！大集会inおおさか」のキャンペーンとして、「さいなら原発・びわ湖ネットワーク」の取り組みとして、今年6月21日に申立てられた美浜3号機の廃炉を求める関西原発訴訟の経過について、井戸弁護士の講演会がもたれた。

「危険予測は大きく、バラツキも大きく見よ」

真下に「C断層」という活断層の巣の中にある美浜原発、「地震は1回しか来ない」

と繰返し地震の不考慮。さらに、1回の地震で構造物の塑性変形で強度が低下、再発の危惧に対し「地震の再来・誘発もあり得ない」と反論。新規制基準（新規制震動ガイド）も、地震規模設定は経験式の適用範囲の十分の検討とバラツキの考慮を指摘、いずれも過剰上乘せになり、ガイドは「審査基準ではなく」「規制委員会がその内容に拘束されるべきではない」「留意点を述べたものに過ぎない」と驚きの反論。

3・18水戸判決は、防災レベルはIAEA（国際原子力機関）の深層防護体型を確保の必要があり、いずれかが欠落すればその原発は安全とは言えず、具体的危険がある、と断罪され原発の設置許可が取り消された。避難計画性の困難・不合理・脆弱さ、特に老朽原発に至っては材料・施工・設計の旧さ、元来開放点検が出来ない宿命原発。被曝の危険。

いずれをとっても安全性・必然性・合理性はなく、ただただ重大事故時の放射能の危険しがなく、「原発廃炉に向けてがんばりましょう」と締めくくられた。

新設原発が困難な中、美浜3号を突破口に、高浜1号・高浜2号と老朽原発の再稼働を阻止すれば、老朽原発はなくなり、20数年で日本の原発はなくなる。

終了後、脱原発市民ウオークin滋賀99回目も！

集会後、井戸謙一弁護士も参加され滋賀県庁前から関電滋賀支社前を通ってびわ湖湖畔までデモ行進。100回の自負と大勢の仲間や市民の結集、なじみの人も多くいた。「99回脱原発市民ウオークin滋賀」は活況であった。

《ご案内》①「第2回脱原発市民ウオークin滋賀近江八幡2021」

日時・場所 11月27日（土）14時 近江八幡駅北口集合・出発

②「第100回脱原発市民ウオークin滋賀」

日時・場所 12月4日（土）13時30分 膳所駅前集合・出発

（脱原発市民ウオークinしが近江八幡2021 沢井清）

協同組合労働について

― 斎藤君はマルクスをどう歪めているか（七） ―

思想攻撃

資本主義の矛盾が吹き荒れ勤労諸社会層への抑圧、搾取の度は強くなり、窮乏、墮落、隷属、さらに全般的な不安が増大し、現代社会は搾取のかたちは違っていても、労働者が奴隷状態であることが共通の認識となりました。岸田首相は、どうやって搾取を、不払い労働の度合いを強めるかと考え、彼の後にいるのは、独占資本のボス連中ですから、ごまかすために「新しい資本主義」なんぞを言いだしたこともわかりません。「新しい資本主義論」は、これまでも法人資本主義だ、経営と所有の分離だ、株主資本主義だ、官製春闘だと、くり返されてきたではありませんか。「新しい」とは資本主義の矛盾の「新しい」発展に他なりません。

私有制度が根本原因です。基本矛盾から眼をそらさせるために、総資本は労働者階級の意識を眠り込ませるために、ありとあらゆる方策をさぐり力を注ぎます。生活の場では多様性、生産・労働現場では「働き方」、労働者協働組合とやらです。労働者協働組合は資本家も労働者もいない「平等」な働き方だ、搾取の度は少なくなり、労働

が楽しくなるとの宣伝と誘導です。強い搾取に苦しむ労働者の気持を逆手にとった思想攻撃です。

オーエンの実験

労働者協働組合の考え方と実践は、資本主義の誕生と発展とともに、それは矛盾の発展でもありませんから、提起されてきました。ちいさな実験は世界中で時と空間をこえくり返し試みられています。空想的社会主義者の英雄、オーエンが典型的です。エンゲルスは『空想から科学へ』でオーエンの意義と限界をこう指摘しています。

【イギリスで労働者の利益のために行なわれた一切の社会運動、一切の現実の進歩はすべてオーウエンの名前に結びついている。たとえば彼は五年間の努力ののち、一八一九年、工場における婦人及び児童労働の制限に関する最初の法律を実現した。また彼はイギリス全国の労働組合が一つの単一の大組合連合体となったときの第一回大会の議長だった。

彼はまた完全な共産主義的社会組織ができるまでの過渡的方策として、一方において協同組合（消費組合及び生産組合）をはじめた。これはそれ以来商人も工場主もかならずしもなくてもいい人物であるという証拠となった。他方において労働バザー、すなわち労働時間を単位とする労働貨幣によって労働生産物を交換する施設をつくった。この施設は必然的に失敗せざるをえない施設ではあったが、ずっと後のプルドンの交換銀行の完全な先駆となった。

もっともこれは次の一点でそれと区別されていた、すなわちこれは一切の社会的害悪の万能薬でなく、単に一層根本的な社会改造へのほんの第一歩にすぎないものと考えられていた。】（『空想から科学へ』 48頁）

エンゲルスは協同組合を「完全な共産主義的な社会組織ができるまでの過渡的方策」として、また、労働時間を単位とする労働貨幣によって労働生産物を交換する施設（労働バザー）も、「単に一層根本的な社会構造へのほんの一步」と考えています。

斎藤君は古い道徳である相互扶助の観点から、労働者協同組合をもち上げます。マルクスも、「評価」している、マルクスの原点がここにあるかのようにです。

マルクスと協同労働

マルクスの「評価」は斎藤君流ではありません。しっかり考えぬかれています。關心ある方は①「国際労働者協会創立宣言」の後ろの方、②種々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示の「五 協働組合運動」に目を通してみてください。「創立宣言」は1864年10月、「指示」は1867年2月に執筆されていますが、今も協働組合の本質をえぐる鋭い分析は、輝きを失ってはおりません。「指示」にマルクスが協働組合労働と社会主義の関係をどのように考えていたかは明らかです。

【五 協同組合労働 国際労働者協会の任務は、労働者階級の自然発生的な運動を結合し、普遍化することであって、なんであるうと、空論的な学説を運動に指示したり押しつけたる事ではない。したがって、大会は特殊な協同組合制度を唱道すべきではなく、若干の一般原理を明らかにするだけにとどめるべきである。

(イ) われわれは、協同組合運動が、階級敵対に基礎をおく現在の社会を改造する諸力

のひとつであることを認める。この運動の大きな功績は、資本にたいする労働の隷属にもとづく、窮乏を生みだす現在の専制的制度を、自由で平等な生産者の連合社会という、福祉をもたらす共和的制度とおきかえることが可能だということを、実地に証明する点にある。

(ロ)しかし、協同組合制度が、個々の賃金奴隷の個人的な努力によってつくりだせる程度の零細な形態に限られるかぎり、それは資本主義社会を改造することはけつしてできないであろう。社会的生産を自由な協同組合労働の巨大な、調和ある一体系に転化するためには、一般的な社会的変化、社会の全般的条件の変化が必要である。この変化は、社会の組織された力、すなわち国家権力を、資本家と地主の手から生産者自身の手に移す以外の方法では、けつして実現することはできない。【マルエン全集⑩ 194〜195頁】

ここでマルクスは協同組合労働の一般的原理を明らかにしています。(イ)では改良闘争としては意義がある、しかし、(ロ)で全体的な社会変化には「社会の組織された力、すなわち国家権力を、資本家と地主の手から生産者自身の手に移す以外の方法では、けつして実現することはできない」と述べているところがポイントです。

この考え方は、『空想から科学へ』のエンゲルスの考え方とちつとも違ふところはありません。マルクスとエンゲルスは一体なのです。

国際労働者協会の活動はほとんどマルクスに支えられていたといっても過言ではありません。エンゲルスが「インターナショナルぬきのマルクスはない」といつているのもこの意味です。この一文はマルクスが戦略家であるだけでなく、戦術家、活動家、なによりも革命家であることを証明しています。

レーニンと協同組合

労働者共同組合の問題は、国際労働者協会(第一インターナショナル)をこえて、第二インターナショナルのペンハーゲン大会(1890年8〜9月)でも論争のテーマになっていきます。それがどのようなものであったかは『ペンハーゲンの国際社会主義者大会における協同組合問題』(レーニン全集⑩、294頁)を参照していただくとして、ここではマルクスの第一インターでの考えを、レーニンがどのようにに発展させているかを示していきます。

【大会はつぎのことをみとめる。

(一)プロレタリア協同組合は、中間搾取をへらし、商品供給者のもとの労働条件に影響をあたえ、職員の状態を改善すること等々によって、労働者階級がその状態を改善することを可能にする。

(二)プロレタリア協同組合は、ストライキ、ロックアウト、迫害その他のさいに援助をあたえることによって、大衆的な経済闘争と政治闘争においてますます重要な意義をもつようになっていく。

(三)プロレタリア協同組合は、それが労働者階級の大衆を組織するとき、労働者階級に事業を自主的に運営し消費を組織することをおしえ、将来の社会主義社会で経済生活の組織者の役割をはたせるように、この分野で労働者階級を訓練する。

大会は、他方ではつぎのことをみとめる。

(一) その収奪が社会主義の重要目標である当の階級の手中に生産手段と交換手段がのこっているあいだは、協同組合の達成しうる改善は、きわめて狭い範囲にかぎられている。

(二) 協同組合は、純商業的な施設であり、また競争の諸条件に圧迫されているため、ブルジョア的な株式会社に退化する傾向がある。

(三) 協同組合は、資本と直接に闘争する組織ではないのに、社会問題を解決する手段であるかのような幻想を生みやすいし、現に生みだしている】(レーニン全集⑩ 283〜284頁)

マルクス、エンゲルス、レーニンの考えはいっしょです。協同組合が社会主義に発展するのではない。私有制廃止の社会主義革命が、協同組合の前進をたしかなものにする、ということです。(つづく 滝野 忠)

◇ 読者からのおたより ◇

「二度と福島のような思いをさせてはならない」 今年はコロナ禍で、何に於いても自粛で晴々とした日がありませんでした。最近では沈黙化してきたような感じですが、予断を許されない状況にあります。さて、お蔭様で「相双の会」114号を発行することができました。

最近では被害者の方々と話す時、でてる言葉は「10年も過ぎたのに」「これからどうなるんだ」「もう俺は何も考えねことにしてる」など投げやりな言葉が多い、何でなのかと考えた時、諦めなのか怒りなのか続きが出てこないですね。要するに東電も国もこれを待っていたのではないでしょう。か、訴訟を起こせば10年過ぎても満足な判決もでない。それに加害者は開き直っている。「お前ら起きてしまったんだからどうしようもない静かにしてる」なのかも知れません。

こんなことを許していたらこれからの社会を担っていく子どもたちはどうなるのか心配になります。今に生きる私たちが「二度と福島のような思いをさせてはならない」という決意であってほしい。(原発事故被害者相双の会 國分富夫)

11・27 廃炉デー集会

日本原電の東海第二原発うごかすな！絶対に再稼働させない。
東海第二原発差止訴訟―控訴審・東京高裁で勝訴するために、なにができるのか

講 演：海渡雄一弁護士(東海第二原発差止訴訟弁護団)

柳田 真(とめよう！東海第二原発首都圏連絡会)

討論議題・提起者

◇ 福島第一原発事故で避難されている方(予定)、◇ 地元・茨城県から(予定)

◇ 日本原電の体質：山崎久隆(たんぼ舎共同代表)、◇ 総括：柳田真

▽日時 11月27日(土) 18時15分より 20時45分

▽会場 文京区民センター3A ▽資料代 500円

▽主催 「とめよう！東海第二原発首都圏連絡会」TEL 070-6650-5549 『たんぼ舎』配信)

『医者私が接種しないわけ』『コロナワクチン3回目打ちますかー医者の私が接種しないわけ』(志賀貢著「幻冬舎」)が目にとまった。ワクチンの働きは「個人の健康を守るため」「個人が生きている社会や国家の安全と存続に寄与すること。だが、どうしても納得できない現実がある。

六か月間に1000人も人が接種後に原因不明の死をとげ(厚労省HP)、「医学的・臨床的観点から納得できない」「臨床データ、いわゆる治験が不十分」、「たった1本の注射で予期せぬ人生の終焉を誰が受入れられるでしょうか」と著者は訴える。3回目の注射前には必ず抗体検査を受け

ようとも（保険対象外自費1800円）。ワクチン接種の鉄則は、体が絶好調のときに打つこと、それには、人に頼らず、自分で体調管理をすること。さらに「基礎疾患と持病の違いを認識」、高血圧の人が接種時にやめるべき薬、不整脈がある人は血栓症に注意、頭痛や頑固な便秘は治してから、持病が複数ある人は呼吸器、心臓、肝臓、腎臓などの検査とチェック、主治医の診断を仰ぎ、救命救急処置ができる病院で接種を受けるように、とくに高齢者に対し、慎重にと忠告している。

「メディアの一部のテレビ・ラジオなどではワクチン推進派の人々が、まるで戦場で兵士に攻撃命令を下しているかのように打って打ってと連呼し、ワクチン接種へと大衆を導こうとしている。少数意見のワクチン慎重派意見は押し潰されようとしている」と警鐘を鳴らしています。（宮本嘉峰）
総選挙はなぜ負けたか？ 10月31日投票票の衆院総選挙闘争総括の敗因は、立憲民主党本部が連合の反共主義に引きずられた頼りなさ、反原発などに象徴される政策の右顧左眈があった。

地元滋賀で言えば「滋賀の国政4党（立憲、国民、共産、社民）：結局国民民主党は招いても来ずだったので3党だが」と偏った指導部による市民の会・しがの、新社会党や緑の党やれいわ新選組や5年前には結集していた幅広い女性層（くらしと政治カフェ）などの離反には眼中にない狭い取り組みが敗因であった。その分の1〜2万票などを抜けきれてないことで、滋賀1、2、4区の「市民と野党の統一候補」は敗北している。4年前の得票の足し算で言えば当選するはずのところも敗北した。また、反原発などの大衆運動の延長線上に統一戦線を、選挙を位置づけないと弱いものである。かつては大小の戦争法案反対運動が各地方・地域にあった。コロナを理由にこの間、大衆運動を怠っていたのが、敗因の低流にある。

自公と維新を、そして国民民主党を足せば3分の2の議席を衆院で許してしまった。公明党が「優柔不断な態度」をとったとしても、重大な改憲の危機である。竹中平蔵は自民党から維新の会に鞍替えして、20〜30代をターゲットにして「非正規」という不安定雇用労働者を量産し、その世代の閉塞感を維新の「改革」路線に導こうとしている。もう一度二度、3度目の大阪都構想ごり押しも早晩出てくる。この「若い世代」は大阪都構想賛成が多数である。

「新しい資本主義の党」：野蛮な新自由主義の政党丸出しで、維新の会が安倍・菅自民党を継承・「発展」させる党として、西から東に攻め上ろうとしている。竹中平蔵のパーソナも兵庫県淡路島に移転して、維新の会と一体となって利権と改憲を虎視眈々とすでに狙いすましている。

改憲阻止の反自民・反独占の統一戦線こそめざさねばならず、それとは別物の「護憲の第3極」などと言うものもともと皆無であるのは、選挙結果からしても明々白々である。

「急がば回れ」とは室町時代に滋賀県から生まれた言葉である。故人の深謀遠慮に学び、一からの大衆運動を一人ひとり職場・地域から一からつくりだし、日本独占資本とその諸政党による上からの生活と権利、平和と民主主義破壊に抗し、労働者・市民のますます広がり行く、闘う団結をつくりだそう。
（稲村守 2021年11月1日）

触発されて 『通信』11月15日号の滝野論文『「ゴータ綱領批判」について』を読みました。触発されて、『ゴータ綱領批判』を読み直しましたよ！ 労線統一の時には力を入れて読みました。考え方の違う団体が「合同」する時の原則が書かれているからです。そして、結果は今の「連合」、あの女性初の会長の今回の選挙についてのコメント、それが如実に示しているとおもいました。という訳で、急遽、別添の拙稿をしたためました。もちろん、『通信』に論稿を執筆している滝野さんと原野人さんのことを思い浮かべながら、書きました。もし、役に立てばであります。

目下、堺利彦が『空想より科学へ』の翻訳と日本の普及に、尋常でない熱意と情熱を注いだことについて、まとめています。このこと、是非とも多くの方に知ってほしく思っています。

（信州松本 中澤秀行 2021年11月12日）